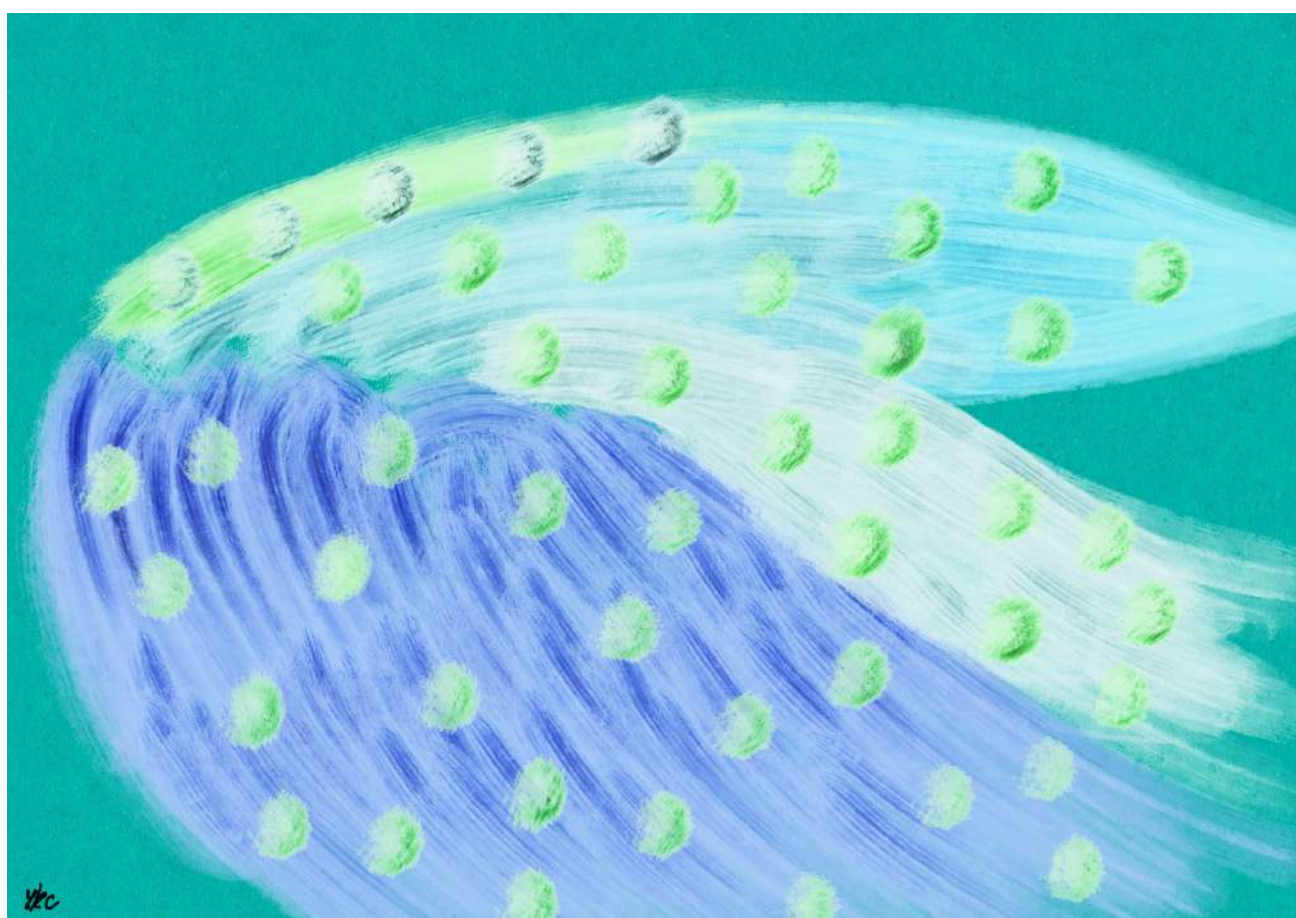

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 303

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



No.1054 エーゲ海の風_A Wind of the Aegean Sea

目次

- 6041.【アテネ旅行記】アテネに無事に到着して:アテネに対する最初の印象
- 6042.【アテネ旅行記】Go Toキャンペーンに見る国家のシャドー
- 6043.【アテネ旅行記】教育の抜本的見直しとシャドーに対する感性と理解の涵養の重要性
- 6044.【アテネ旅行記】日本への深層的な次元での精神的接近と本日のアテネ観光の計画
- 6045.【アテネ旅行記】アテネ国立考古学博物館を訪れて
- 6046.【アテネ旅行記】アテネ滞在3日目の計画と今朝方の夢
- 6047.【アテネ旅行記】Goulandris Museumを訪れて
- 6048.【アテネ旅行記】アテネ滞在4日目の計画と今朝方の夢
- 6049.【アテネ旅行記】アテネ滞在4日目を振り返って
- 6050.【アテネ旅行記】アテネ滞在5日目の朝の夢
- 6051.【アテネ旅行記】本日の古代遺跡巡りと貴重な生命時間について
- 6052.【アテネ旅行記】昨日起こった事件
- 6053.【アテネ旅行記】盗難事件の問題の解決
- 6054.【アテネ旅行記】アテネ滞在7日目の計画
- 6055.【アテネ旅行記】アテネ国立現代美術館を訪れて
- 6056.【アテネ旅行記】アテネ滞在8日目の夢
- 6057.【アテネ旅行記】アテネ滞在8日目の計画
- 6058.【アテネ旅行記】不公平さを是正する経済思想と経済システムへの関心
- 6059.【アテネ旅行記】MOMus – Museum Alex Mylonaを訪れて
- 6060.【アテネ旅行記】アテネ出発の朝に見た夢

6041.【アテネ旅行記】アテネに無事に到着して:アテネに対する最初の印象

つい先ほど、無事にアテネ空港に到着した。今、空港からアテネ市内に向かう高速バスの中にいる。

今回搭乗したフライトは、やはりコロナを考慮して満席になっておらず、乗客が適度な距離を保てるような形になっていた。機内ではマスク着用が義務付けられていたが、特に息苦しくなく、3時間のフライトはあっという間であった。今回はフライト中にパソコンを開くことをせず、ロイ・バスカーの思想体系について解説した書籍を食い入るように読み進めていた。その書籍を読むのは今回が初めてであり、いつもであれば初読の書籍はざっと読み進め、その書籍で書かれていることに慣れ親しむような形で読書を進めている。

今回はそのような形で土地勘を養うような読書ではなく、最初から一言一句読み進めるようにしていた。というのも、その書籍はバスカー本人が書いたものではなく、他の学者が書いた概要書であり、説明がとても平易だったからである。本日ホテルに到着してからも続きを読むかもしれない。そうすれば、今日か明日中に初読を終えることができそうだ。

今回のフライトにおいては荷物の数量制限があり、帰りの荷物を増やすことはあまり得策ではない。そうしたことから、アテネ市内で古書店巡りをする際には、美学書に絞って古書を求めようと思う。真善美の発祥の地でもあるアテネで購入する古書は、必ずや思い出深いものになるだろう。古書との素敵な出会いがあることを期待する。

アテネ空港に到着し、飛行機から空港に向かうシャトルバスに移動している時、初めてアテネの外気に触れたのだが、思っていたほど暑くはなかった。確かに気温は30度を超えていたのだが、湿度が高くないためか、カラッとした暑さだった。このような気候であれば、朝夕はそれほど暑さを感じることはないだろうし、日中は日陰を選んで移動をすれば、汗だくになるようなことはなさそうだ。

飛行機の上からアテネ全貌を眺めていたときに、アテネの固有な風土を思った。気候区分としては、確かに半年前に訪れたマルタ共和国と同じ区分になるのだろうが、空の上から見た土地の雰囲気は随分異なっているように思えた。空の上から見たアテネは、黄土色の土地に、転々とした形で緑が植えられている光景が印象に残っている。

今この瞬間にアテネの夏を味わっていると、こうした暑さを持つ土地からも古代ギリシャにおいて偉大な哲学者が数多く生まれたことに思いを馳せずにはいられない。以前の私の偏見としては、暑い地域には優れた哲学者はほとんど生まれていないと思っていたのだが、ギリシャは例外の土地なのかもしれない。もちろん、古代ギリシャにおいては今のように気温が高くなかった可能性もあるし、そもそも社会構造が異なり、古代ギリシャにおいては哲学者は考えることに専念できるような社会的状況の中にあっただのかもしれないという可能性もある。いずれにせよ、暑い地域においても哲学的な思索を深めることが不可能なわけではないことを改めて思う。

今乗車しているバスは、空港の4番出口から出ているX95という高速バスだ。市内まで1時間強ほどの乗車時間となる。チケットカウンターは乗り場のすぐ横にあり、そこは現金しか受け付けていないと事前に知っていたので、久しぶりに現金で支払いをした。片道は6ユーロである。15分に1本バスが出ており、1本早いバスに乗れたことは幸運である。ホテルに到着したら荷物を置き、歩いてすぐ近くのオーガニックスーパーに行き、水と夕食を購入したい。今日の夕食はサラダとチーズかタンパク質が豊富なクラッカーか何かを摂取しようと思う。アテネ:2020/7/23(木)17:10

6042.【アテネ旅行記】Go Toキャンペーンに見る国家のシャドー

時刻は午前4時を迎えた。昨日アテネに到着し、今日からアテネ滞在の2日目が始まり、本格的に観光をするのは本日からである。今、アテネ時間で4時ということは、フローニンゲン時間で3時ということになる。一応昨夜からアテネ時間に合わせて、いつもと同じように午後10時前に就寝をした。一度3時前に目が覚め、そこから再度睡眠を取ろうと思ったのだが、うまく寝付くことができなかった。というのも、あるテーマについて突如として考え出す自分がいたからである。

アテネ旅行の前日に、協働者の方の後援で対談講演会をさせていただいた。そのときに協働者の方が、「加藤さんをご存知ないかもしれませんが、日本ではGo Toキャンペーンについて今問題になっているんですよ」と述べた。そのキャンペーンについては名前だけ耳にしたことがあったので、その内容について簡単に聞き、その場においてはそのような問題があるのかと思った程度だった。それがなぜか、つい数時間前にベッドの上でその問題について考えている自分がいた。

協働者の方からGo Toキャンペーンについて説明を受けたのは数十秒ほどであり、そこから何か自分で調べたわけでは決してないのだが、「またしても国はそうした問題解決策を打つことにしたのか」という言葉が自ずから漏れた。そのキャンペーンは国内の観光需要を喚起させることが目的のことだったが、その根幹には経済を刺激し、経済を立て直すという目的があるように思える。確かに、今回のコロナで国として経済的な打撃を受けたことは間違いないだろうし、現代国家の運営上、経済は重要な要素なのだが、1つの問題は「経済だけが国の運営で重要だ」という発想に陥っていないかということである。

これは集合規模でのシャドーなのかもしれない。国の運営上、経済というのは重要な要素の1つなのだが、決してそれだけが重要なのではない。先日の対談講演会でも話題に挙がった「真善美」の観点で言えば、経済というのも当然ながら真善美の観点で考えていくべきものなのだが、それを真の領域だけを通じて、しかもそれがいまだ合理性段階の発想を通じて扱われている点にも大きな問題意識を持つ。

そこから考えていたのは、確かに経済が本当に危機的な状況になっていて、それに対して緊急の措置を施す必要がある場合には、経済だけに焦点を絞って手を打つことは自然であり、むしろそれが喫緊の課題であればあるほどに、それをする必要がある。例えば、目の前で火事が起こっているのであれば、一刻も早く家事を消すことが先決である。しかしながら問題は、火事を消して終わりにするのではなく、そもそも火事がいかなる発想と行動から生み出されたのかを改めて検証することが重要なのではないだろうか。今回のコロナの件で言えば、コロナが要因になって経済が打撃を受けたという構図が見えるが、重要なことは単なる要因分析ではない。

「そもそも経済一辺倒の発想で運営していた国家のあり方がおかしかったのではないか？」というような、大前提を問うような考え方が重要だと思うのだが、そうした考え方はGo Toキャンペーンの背後にあったのだろうか？「コロナによって観光需要が打撃を受けました。だから観光需要を増加させるための打ち手を打ちました」だけで発想が終わってしまっているのであれば、「ニキビができました。だからクレアラシルを塗りました」程度の次元の発想なのではないかと思う。学習理論の観点で言えば、こうした発想はシングルルーラーニングの問題解決姿勢だと言えるだろう。そこでは目の前に起こった現象にしか着目せず、その現象に対して打ち手を打つことはするものの、そもそも

その現象がいかなる複合的な要因で生じたのかに対する考察はほとんどなされず、また打ち手の背景にある自身の発想の枠組みや前提を問うようなあり方はない。

複雑な要因を分析していく前者の姿勢も当然ながら重要なのだが、とりわけ後者が重要であり、それができるかどうかダブルループラーニングの鍵を握る。協働者の方の説明を聞いている限りだと、今回のGo Toキャンペーンというのは、シングルループラーニングの発想で生み出された施策のようにしか思えなかった。

そこからさらに考えていたことは、おそらくこうした問題解決の姿勢というのは、何も今回のコロナの件だけで見られたものではなく、国家規模で以前から慢性的に見られていたものなのではないかということである。さらには、上記で述べたように、依然として金銭にばかり着目してしまう発想のあり方が個人や社会全体に見られ、それは個人と社会の双方の根深いシャドーなのではないかということについても考えていた。

おそらく、この根深いシャドーに個人と社会の双方が光を当てていかなければ、個人も社会も何も変わらないのではないかと思う。とりわけ、社会の変容において、社会のシャドーを浮き彫りにし、社会全体としてそれに真摯に向き合っていくことが不可欠なのだが、依然としてシャドーは隠蔽されたままである。この点に対する具体的な関与の方法について模索を続けている自分がある。今少しばかりその道が見えて来ており、その道を歩むことが1つ自分に課せられた重要な役割なのだろう。
アテネ:2020/7/24(金)04:48

6043.【アテネ旅行記】教育の抜本的見直しとシャドーに対する感性と理解の涵養の重要性

時刻は午前5時を迎えようとしている。アテネに到着してこれからアテネの滞在を満喫しようと思っていた矢先に、なぜGo Toキャンペーンについて考えていたのか不思議になる。きっとそこには、日本人としての自意識と母国を思う気持ちがあったからなのだろうか。母国を思う気持ちが強いほど、やはり今の母国の現状には危惧をする。仮にコロナの1件だけではなく、今後国家として諸々の自然災害や他国の侵略的行為によって、国家的な危機に瀕したとしても、私は大して日本は変わらないのではないかという問題意識を持っている。そうした危機に瀕したとき、おそらく国が取らる方針は、依然として物質経済的な次元のものしかないのではないかということに大きな憂いを持

つ。そうした方針によって、再び一時的に経済的な状況が改善されたとしても、本当に豊かな国の実現が果たされるのだろうか。

物質経済的な施策の重要性は言うまでもないが、物質経済的な形で全てをなんとかしようとする発想に限界があることに気づく必要があり、そして重要なことは、そもそもなぜそのような発想が生まれているのかという根本的な原因ないしは前提を問うことが本当に求められているように思う。それを他人任せにすることはできず、それは国全体として考えるべき問題であり、同時に個人1人1人が考えるべき問題ではないだろうか。個人や社会の隠れた発想の前提を問う思考というのは、成人発達理論やインテグラル理論の観点で言えば、「後慣習的段階」の思考形態であり、そうした思考を育んでいくことは本当に大切だと思う。

その観点において、教育哲学者のザカリー・スタインが指摘しているように、子供と成人の双方の教育の抜本的な見直しは不可欠かと思う。スタインはまさに、現代社会の問題の根元に教育の失敗を見ている。とりわけエリート教育の失敗、言い換えれば、国家を主導していくエリート層の教育が失敗に終わっていることを指摘している。確かに、金融危機を引き起こした要因を作り出したのは、ウォール街にいるアイビーリーグ出身のエリート層が主であったし、米国において戦争を主導しているのもそうした大学出身のエリート層である。

我が国においても、政治経済的な問題の根源を生み出しているのは、難関大学と呼ばれる大学を卒業したエリート層かと思われる。そうした観点において、真に国を導き、国を豊かにしていくためのリーダーを養う教育は非常に重要だと思われる。それはもちろん、エリート層への教育を見直すだけでなく、全ての国民に施す教育のあり方そのものを抜本的に問いただしていく必要があるだろう。しかし私は、やはりそれだけでは十分ではないように思える。

スタインが指摘するように、教育は人間の意識と知性を涵養していく上で、端的にはknowing, doing, beingをより深いものにしていく上で不可欠のものである。しかしながら、教育を根本的に見直すだけでは足りない何かがあるように思う。それが何かというと、シャドーに対する認識の欠落である。少なくとも、リーダーを担う人間は、自身のシャドーに対して深い認識を持つ必要があるだろうし、社会のシャドーが何かに対する鋭い認識を持つ必要があるだろう。そうでなければ、Go Toキャ

ンペーンのように、意思決定者のシャドーと社会のシャドーが残ったまま、それらが投影される形になされる対処療法的な打ち手が後を絶たなくなってしまう。

シャドーに対する感性を育むことや理解を深めることも教育の範疇と言えそうかもしれないが、スタインだけではないが——スタインの主著“Education in a Time Between Worlds: Essays on the Future of Schools, Technology, and Society (2019)”にはシャドーについての言及はほとんどないが、ある対談インタビューにおいては集合規模でのシャドワークの重要性についても言及している——、そうした指摘を行っている教育哲学者はあまりいないこともあり、ここに書き留めておくことにした。アテネ:2020/7/24(金)05:24

6044.【アテネ旅行記】日本への深層的な次元での精神的接近と本日のアテネ観光の計画

時刻は午前5時半を迎えようとしている。1つ前の日記では、今日から本格的に始まるアテネ観光の具体的な計画を書くつもりだったのだが、いつの間にか当初の目的から離れ、日本が直面する問題について考えている自分がいた。

ちょうど来週から欧米での生活も9年目に入る。今この瞬間において、このようにしてアテネにいただけではなく、もう丸8年間も物理的に日本から離れて生活をしている自分がいる。欧米での8年間の生活において、精神的に日本から離れる時期もあったが、ここ最近では再び日本に接近しているのではないかと思う。それは以前と比べて、より深層的な次元での精神的接近である。

今日からアテネを歩き回る観光を始めようと思っていたので、本音を言えば、もっと熟睡したかったのだが、深夜にふと目覚め、日本が現在直面している問題について考えることを突きつけられている自分がいた。おそらくそれは、日本だけの問題というよりも、この地球全体の問題とも繋がっているように思える。数日前の日記で書き留めたように、それはもう人間中心的な発想で解決できるような問題では決してなく、そうした発想から脱却し、さらには集合規模で蔓延するシャドーと真に対峙しなければ解決できないような問題なのだと思う。

自分自身が自分のシャドーと絶えず向き合うこと、自分が属する社会のシャドーに絶えず認識の光を与えていくこと、そして社会のシャドーを指摘するだけではなく、社会がどうすればそのシャドーを変容させていくことができるのかについて具体的な指針を示していくこと。それらに関与していこうと

いう気持ちが日々強まる。今回アテネ旅行に持参した書籍で扱われているロイ・バスカーの思想を学んでいることや、フランクフルト学派の第1世代・第2世代の批判理論を学んでいることや、群衆心理学の探究を進めていることは、おそらくそうした気持ちの現れだろう。

そのようなことを思いながらふとホテルの窓から外を見ると、午前5時半を過ぎても辺りは真っ暗のままである。フローニンゲンにおいてはもうこの時間帯は明るくなっている頃だ。調べてみると、アテネの日の出の時間はおよそ6時半とのことであり、随分と遅いのだなと思った。天気予報を確認すると、気持ちいいぐらいに滞在期間中の全ての日に快晴マークが付されている。雲1つない快晴の日がここまで続くことを体験するのは、南カリフォルニアのアーバインに住んでいた頃に経験したことがあるぐらいだ。

今日の最高気温は34度、最低気温は23度とのことである。気温の推移を見ると、興味深いことに午前8時までは気温が下がっていく傾向にあり、気温のピークは午後4時ぐらいに迎える。昨日の感覚だと、気温は高くても湿度がさほどないおかげか、アテネの夏は過ごしやすいという印象を受けた。今日はどこに行こうかと考えたときに、今日は平日ということもあるので、土日に混雑しそうなアテネ国立考古学博物館に足を運ぼうかと思う。コロナによる入場制限により、平日にも混むリスクがあるとのことなので、今日は朝から動こうかと思う。

できるだけ朝早く博物館に行き、ゆっくりと見学をした後に、ちょうど帰り際にはいくつかの古書店を通ることになりそうなので、時間が許せば5店ほどの古書店を覗いてみようと思う。そこでは何か良い美学書と出会うことができれば幸いだ。アテネ:2020/7/24(金)05:55

6045.【アテネ旅行記】アテネ国立考古学博物館を訪れて

時刻は午後6時半を迎えた。アテネ滞在の2日目は充実感と共にゆっくりと終わりに向かっている。今日から本格的に観光を始めたのだが、本日はアテネ国立考古学博物館を訪れた。

普段フローニンゲンで生活をしている時には朝食らしいものは摂っておらず、リンゴを1つだけ食べるだけである。一方で、旅行中においては午前中から動き回ることもあり、ホテルの朝食をしっかりと摂るようにしている。今回滞在しているホテルは4つ星ホテルであり、とても快適であるだけではなく、朝食も素晴らしかった。レストランが10階にあって、外のテラス席で朝食を食べたのだが、その時

にはなんとパルテノン神殿を拝むことができ驚いた。また、パルテノン神殿の向こう側にはエーゲ海が広がっていて、レストランのテラス席からの眺めは格別であった。朝食を摂り始めたのが午前7時過ぎであったから、まだ気温も高くなく、大変心地良かった。

本日訪れたアテネ国立考古学博物館についてであるが、所蔵されている骨董品や銅像などの数が豊富であり、全てをくまなく見ていると切りが無く、関心のある物だけを見て行ったのだが、それでも数時間ほど博物館に滞在することになった。今日は歩き疲れたこともあり、また展示品から得られた直接的な感覚を十分に消化し切れていないこともあるため、明日以降に博物館に関する具体的な感想を書ければと思う。

博物館を訪れた後は古書店を巡ってみた。4店巡った古書店のうち、1店は閉まっていて、3店については残念ながら目星の書籍はなかった。一方で、古書店近くの新書を扱っている書店に足を運んでみると、そこで2冊ほど興味深い書籍を見つけ、それらを購入することにした。1冊は、精神分析の観点から芸術について扱っている“Art & Psychoanalysis (2013)”であり、もう1冊はテオドール・アドルノが執筆した“Quasi Una Fantasia: Essays on Modern Music (1963)”である。この2つの書籍以外にも、ジャック・ラカンやスラヴォイ・ジジエクの興味深い書籍もあったのだが、それらはこの書店でわざわざ購入する必要はなく、フローニンゲンに戻ってから注文すれば良いと判断した。

本日の国立考古学博物館を訪れたことによって、古代ギリシャの歴史的な品々を見ることはもう十分であるような気がした。そうしたこともあり、明日からは美術館をゆっくりと巡っていく。当初予定になかったが、博物館をこれ以上巡ることをやめて、その代わりに現代美術館を2つほど訪れることにした。朝や夜に本日購入した書籍をホテルでゆっくりと読み進め、日中は美術館や古代遺跡を巡るようにしたい。また、本日足を運んだ古書店以外にも、アテネにはまだいくつか足を運んでみたい古書店があるので、滞在中にそれらの店にも立ち寄ろうと思う。今日は昨日よりも早く就寝し、明日に備えたい。アテネ:2020/7/24(金) 18:43

6046.【アテネ旅行記】アテネ滞在3日目の計画と今朝方の夢

時刻は午前5時半を迎えた。昨日は久しぶりに見知らぬ土地を観光したということもあり、刺激が随分と多く、また炎天下を歩いたということもあって、ホテルに到着すると、もう日記を書いたり、創作活

動や読書をしたりするエネルギーがなかった。そこで改めて、心身の状態を整えることの大切さを思った。フローニンゲンで日々創作活動と読書に打ち込んでいるのは、自分が絶えず心身の状態を最良のものにしているからなのだと改めてわかったのである。今日からはアテネ滞在の3日目が始まり、観光2日目となる。

アテネの日中は木陰に入れば涼しく、気温は30度を超えていても汗をかくことはそれほどない。しかし日差しが強いことは確かなので、本日からあまり無理をせず、観光名所を巡るのは1日に1つほどにする。古代遺跡であれば複数個回れるが、博物館や美術館を巡るのは1日に1つにする。そうでなければ読書と同じであり、自分の内側に流入してくるものがあまりにも多いので、それらを消化し切ることができなくなってしまう。

そのようなことを考えてみた時に、今日はGoulandris Museumという場所に足を運びたい。昨日はアテネ国立考古学博物館を訪れたので、今日は古代の歴史的な品々を見るというよりも、絵画作品を見たい気分である。そうしたこともあってこの美術館を訪れることにした。明日はさらに気分を変えて、2つの現代美術館のうち、どちらか1つを訪れようと思う。本日、Goulandris Museumを訪れたら、ちょうど帰りがけに3つの本屋があるので、それらを覗いてみて、何かいい本がないかを探してみよう。

昨日訪れた書店で数時間ほど芸術関係と哲学関係のコーナーであれこれと書籍を探していたので、それらの領域に関するギリシア語をいくつか覚えることができた。最初はそれらのコーナーにたどり着くことも難しかったが、書籍を吟味している中で、いくつかのギリシャ語に親しむことができたのは嬉しい副産物であった。今日もまた良い書籍があったら迷わず購入したいと思う。旅先で購入する書籍は思い出の品となり、そうした書籍から得られるものは通常購入する書籍から得られるものとはまた違ったものになる。

今日足を運ぶ美術館は10時から開くようなので、それまではホテルでゆっくりしようと思う。朝食を摂るレストランからの眺めは素晴らしいので、現在読み進めている本でも持っていき、朝食を食べてからもしばらくはそこで寛ぎながら読書を楽しみたいと思う。アテネに到着した日の夜は夢を見ることはなかったが、今朝方は夢を見ていた。夢の中で私は、アテネを彷彿とさせるような街にした。そこがアテネのようだと思ったのは、街の各所に古代遺跡があったからである。

私は傾斜の激しくないある坂道を下っていて、そこで小中学校時代の野球部の友人2人と出会った。彼らに話しかけると、話は部活動のことになった。どうやら野球部は、大事な大会が迫っているらしかった。彼ら2人はピッチャーなのだが、もう1人のピッチャーが今怪我をしているらしく、2人だけで大会を乗り切るのは難しいということ話を話してくれていた。どうやら3人でローテーションすることがこれまでうまくいっていたらしく、やはり2人だと連戦による疲労が溜まってしまい、パフォーマンスが落ちてしまうとのことだった。2人の話を聞いていると、いつの間にか平坦な道の上を歩いていることに気づいた。そして遙か前方には、輝くエーゲ海のような海が見えていた。その日は日差しがとても強かったが、まさに実際のアテネの気候と同じく、暑さを感じることはさほどなかった。するといつの間にか、私の体は市内の古代遺跡の1つにあった。そこはアクロポリス神殿のようでもあり、同時にどこかの城壁のようでもあった。

そこで私は、太陽の日差しが当たらない木陰で休んでいて、近くには小中高時代の親友(NK)がいた。彼とは今でも付き合いがあり、とても仲がいいということもあって、そこに彼がいることが嬉しくなり、すぐに声をかけた。すると彼も笑顔で挨拶を返してくれ、そこからはその街での滞在をどのように楽しんでいるのかの話にあった。お互いにいろいろな場所にすでに出かけていて、半ズボンで散策を楽しんでいたからか、足が随分と日に焼けていて、実際に皮が剥け始めていた。自分の足が少しばかり痒くなり、かくとそこの部分の焼けた皮膚が剥がれ落ちた。そこから私たちは、足を少々かきながら話を続けた。そのような夢を見ていた。

早速アテネと思われる場所が夢の中に出てきたことは興味深い。昨日市内を歩くのが初めてだったこともあり、見慣れない景色の光景が自分の内側に刺激として大量に流入していたのだろう。本日は実質的な観光の2日目となる。昨日の慣れもあるかと思うが、今日もまた新たな刺激が自分の内側に入ってくるだろう。それは創作活動と探究活動の肥やしになってくれるものになると期待する。アテネ:2020/7/25(土)06:16

6047.【アテネ旅行記】Goulandris Museumを訪れて

時刻は午後4時を迎えた。今日は午前10時過ぎにホテルを出発し、歩いて比較的近くにあるGoulandris Museumに行ってきた。ここは2人の資産家の夫婦が作った美術館であり、規模はそれほど大きくないのだが、大変貴重な作品が幾つもあり、鑑賞体験として実りあるものだった。

偶然ながら、スイスの画家ポール・クレーに数ヶ月前に関心を持ち、この9月にはスイスのベルンにあるクレー美術館に足を運ぼうと思っていたところ、本日訪れた美術館にクレーの作品が所蔵されていた。クレーへの関心があったこともあり、帰りがけにはクレーの思想が滲み出す言葉がいくつも掲載されている画集を購入した。

クレー以外にも、何人もの偉大な画家の作品があった。半年前のミラノ旅行の際にジョルジョ・デ・キリコの作品と出会い、それをきっかけにキリコの画集をミラノのキリコ展で何冊か購入しており、今日もまたキリコの作品と再会を果たした。それは、2頭の馬が戯れながら砂浜を走っている小さな絵である。その作品に妙に惹かれる何かがあり、しばらくその作品の前に立ちすくんでいた。

自分自身が絵を描くことを始めたことによって、そうした直接体験があるおかげで、これまでとは作品を見る観点が違うことに気づいた。どのような筆遣いをしているのか、どのような色を選択しているのかという観点だけではなく、絵具の種類や背景の画材にまで視線が向かっている自分がいた。作品の解説パネルには、絵具の種類や画材についての情報もあることを今日改めて気づいた。キリコ以外にも、ピカソ、ゴッホ、マティス、カンディンスキー、ミロ、モジリアーニなどの作品も飾られていて、それらからも何かしらの刺激を受けている自分がいた。

今日はまだ時間があり、さらには先ほど仮眠を取ったこともあって、夕方から夜にかけて創作活動を行う気力がある。絵を描く際には、本日得られた観点や試したいと思うことを実験してみようと思う。

美術館を訪れた後に、昨日に引き続き、今日も2店ほど本屋に立ち寄った。昨日は幸運にも2冊の良書と出会うことができたが、今日は自分の関心を強く引く書籍とは出会えなかった。それではこれから少しばり読書をして、その後作曲実践をし、そこから絵を描きたいと思う。アテネ:2020/7/25

(土)16:22

6048.【アテネ旅行記】アテネ滞在4日目の計画と今朝方の夢

時刻は午前5時を迎えた。昨夜も10時あたりに就寝し、今朝も午前4時過ぎに目覚めた。この時間帯のアテネは真っ暗であり、日が昇り始めるまでにあと1時間半ほどある。宿泊しているホテルはアテネ市内の中心部なのだが、ホテルの周りはとても静かである。ホテルの防音対策がなされているためなのかもしれないが、静かな環境の中に身を置けることの有り難さを改めて感じている。

今日はアテネ滞在4日目であり、思っていた以上に時が流れるのが早い。今日をもってアテネ滞りの折り返しになると言えるだろうか。本日はホテルの朝食を摂ったら、速やかにホテルを出発し、National Art Gallery: Alexandros Soutsosに向かう。ここには以前から注目をしていた、オランダの画家ピエト・モンドリアンの“Landscape with a Mill”という作品がある。その他にも鑑賞したい作品がいくつもある。

昨日訪れた美術館でも実感したように、絵を描き始めたことによって絵画を見る目が変わってきたことが面白い。本日足を運ぶ美術館でも、また新たな気づきがあるだろうし、それが自分の創作活動に何かしらの良い影響を及ぼしてくれるだろう。ホテルからこの美術館までは、歩いて1時間以上かかるので、アテネのこの暑さでそれだけの時間を歩くのは得策ではない。また、明日に古代遺跡巡りをしようと思うので、明日に備えて体力は十分に残しておきたい。そうしたこともあり、今日はこの美術館へは地下鉄を利用して向かう。ホテルの近くにある地下鉄駅から5駅ほどの駅で降り、そこから美術館に歩いて向かう。今日観光する場所はここだけであり、美術館で芸術作品を堪能したら速やかにホテルに戻って、ホテルでゆっくりしようと思う。

今朝方もまた夢を少しばかり見ていた。夢の中で私は、一昔前に活躍していたある女優さんと話していた。その女優さんはあることをきっかけに女優業を辞めたのだが、夢の中ではまだ女優を続けているようだった。具体的な内容は忘れたが、お互いに年が近いということもあり、話がしやすかったことを覚えている。

その後、夢の場面が変わり、次の夢の場面では、私は夢を俯瞰的に眺める者だった。そこでは海上の姿が映し出されていて、海でシンクロの世界大会が行われていた。舞台はもう決勝であり、決勝に進めたのはわずか5人だった。その中に、日本の大手メーカーに勤務している小柄な日本人男性がいた。彼は見事な演技を見せ、3位入賞で銅メダルを獲得した。演技の最中に、私は海の深さが気になっていて、あのような海底が見えない深さの海の上でシンクロを行うことを想像するだけで、ちょっとした恐怖感があった。

大会終了後、何かの届出をするために、決勝に進んだ選手たちは、会場近くの役所に行って、そこで何かの手続きをしていた。銅メダルを獲得した日本人選手は、一般人が並んでいる列をすり抜けていき、列の先頭に速やかに行き、すぐに手続きを行うことができた。そこで偶然ながら、決勝に

進出していたギリシア人選手と出会い、彼はその選手に英語で話しかけ、何やら楽しげに会話をしていた。今朝はそのような夢を見ていた。アテネ:2020/7/26(日)05:21

6049.【アテネ旅行記】アテネ滞在4日目を振り返って

時刻は午後7時を迎えた。アテネ滞在の4日目が終わりに向かっている。本日、初めてアテネの日曜日を体験したのだが、市内からまるで人が消えてしまったかのように、人の姿がめっきり減っていた。市内の店の多くが休みになっていたこともあり、人の姿をあまり見ることがなかったのだろう。そんな中、本日は宿泊しているホテルからすぐ近くのシンタグマ駅からNational Art Galleryに向かった。事前にさほど下調べをしていなかったのだが、宿泊しているホテルはシンタグマ広場というアテネの中心部の有名な広場のすぐそばである。

先ほど初めて知ったのだが、この広場は、1844年ギリシア王国の憲法が発布された場所とのことだった。確かに、昨日観光からホテルに戻ってくる時に、広場の真ん前に立派な建物があるなど思っていたのだが、それが国会議事堂だと気づかなかった。ピストルを携えた警備員たちが建物の前にいたり、広場の脇に警察官たちが常時いる理由が初めてわかった。広場は地下鉄駅とつながっており、今日はそこを使った。最初私は、トラムとメトロの区別がわかっておらず、携帯の地図にはメトロの表示が出ていたのだが、地上を走るトラムの駅で待っていた。

そう言えば、ハーグに住む友人がハーグの街の地上を走る乗り物のことをトラムと呼んでいたことを思い出し、また東京で「地下鉄メトロ」のようなカタカナ言葉を何度も聞いたことがあることを思い出し、トラムとメトロが別の交通手段だとそこで認識した。私は極度に一般常識が欠けている分野があり、今回はその点が露呈した。自分の知識空間の中ではなんとなくトラムとメトロの区別はついていたように思うのだが、今回のような認識の誤りを体感として理解するような失敗体験がないと、私はそうした知識の確からしさを信じることができない傾向がある。つまり、トラムとメトロは知識の上では違うものだと何となくわかっていたが、それが実際に違うものだと本当に理解するためには、こうした失敗体験が必要だということである。

つくづく自分の知識体系は面倒な性質を持っているように思う。本当に体験や実験をしてみないと、その知識を信じることができないという性質は、社会生活を送る上で時折困難さを生じさせるの

だが、それも1つの自分の個性かと腹を括り、これからもそれを受け入れながら社会生活を細々と営んでいこうと改めて思った。そのようなことを考えながら、トラムの駅を後にして、地下鉄駅に向かったことを覚えている。National Art Galleryの最寄り駅までは5駅ほどであり、地下鉄に乗っている時間はわずか7分ほどだった。

今回空港からシンタグマ広場まで高速バスで来たのだが、地下鉄も空港まで行けることがわかり、帰りは地下鉄を利用してもいいかと思った。帰りのフライトの時間帯や、どちらが快適なのかを再度吟味して最終的な意思決定をしよう。

脱線したが、本日足を運んだNational Art Galleryについて感想を述べると、期待外れであった。というのも、絵画作品が所蔵されている建物が閉まっていて、彫刻が置かれている建物しか見学ができなかったのである。しかも、彫刻に関しても数は多くなく、1階建てのフロアの半分ほどを占める数しか置かれておらず、これといった作品もなかった。道理で入場料が3ユーロと安いわけだと納得した。

結局私は、10分ほどでその場を後にし、その他に見るものがそこになかったので、すぐさま駅に引き返し、ホテルに戻った。ちょうど明日は諸々の古代遺跡を巡ろうと考えていて、明日に備えて体力を温存しておきたかったこともあり、ホテルに早く戻った。ホテルに戻ったのはまだ昼前だったと思う。そこからシャワーを浴びて、読書をし、仮眠を取った。そこから今に至るまでに1曲ほど曲を作ったり、パソコンを通じて映画を2本見た。

旅の最中においては、フローニンゲンの書斎の環境と随分と異なるため、どうしても創作活動に集中しづらく、その点は仕方ないかと思っている。その分、観光でしか得られない体験をし、それを通じて養われた内的感覚を今後の創作活動に活かしていきたいと思う。創作活動が思うようにできないことは、創作への渴望感をもたらす上では良いことなのかもしれないという見方もできる。今日も早く寝て、明日の観光に備えようと思う。アテネ:2020/7/26(日)19:46

6050.【アテネ旅行記】アテネ滞在5日目の朝の夢

時刻は午前5時半を迎えた。アテネ滞在の5日目が静かに始まった。フローニンゲンではこの時間帯はもう明るくなり始めている時間なのだが、アテネではまだ暗い。フローニンゲンでの毎朝の起床

は、小鳥たちの鳴き声に迎えられるのだが、アテネではそうはいかない。こうしたところにも2つの街の違いを見る。

アテネは連日快晴続きであり、本当に申し分ない天気である。最高気温は35度前後、最低気温は25度前後であり、フローニンゲンと比べて天と地ほどの差がある。ちょうど今頃の東京の天気を調べてみたところ、東京も気温が上がっているようなのだが、アテネと異なるのはやはりその湿度だ。アテネは湿度が低く、乾いているために木陰に入れば暑さをそれほど感じず、夜はクーラーなど付けなくても寝ることができる。

様々な都市ごとに本当に気候が違うことを実感し、それは自分の心身に異なる影響を与えていることを実感する。心身に与える影響が異なれば、自ずとそれは自分の日々の取り組みに与える影響も異なることを意味するだろう。アテネの天気は申し分ないのだが、やはり私は夏でも肌寒いぐらいのフローニンゲンの気候が好きであり、あの街の気候のおかげで日々の創作活動と探究に真に打ち込んでいるのだと実感する。

今朝方は印象的な夢を見ていた。最初の夢の場面では、小中学校時代の友人(KS)と親身になって話をしていた。場所は日本の庭園があるような小さな旅館であり、私たちは畳部屋と軒先のちょうど中間あたりの場所に立って話をしていた。しばらく話をしてからその場に座り込み、そこからより突っ込んだ話をし始めた。お互いに最初から笑顔で話をしていたのだが、どうもお互いの笑顔の背後には何かがあるということを感じていた。

すると友人の方から、先日身内が亡くなったということを打ち明けた。実は私も先日身内を失っており、私もそれを友人に伝えた。2人の笑顔の背後に何かあるというのは、身内の死に伴う追悼の念があったのだ。だがそれは哀しみとは少し異なるものだった。弔いの感情なのだが、それを哀しみと表現することはできず、より複雑で名付けの難しい感情だった。1人の人間が人生の役割を果たしたことに対する労いの気持ちと、あの世に向かう祝福のような気持ちが交じっていた。それでいて、静寂な気持ちもそこに混在していた。

外は晴れており、季節は夏のようにだった。どこからともなく、セミの鳴き声が聞こえてくるかのようだった。

次の夢の場面では、私は大学時代の友達たちと話をしていた。最初に出会ったのはゼミの友人たちであり、彼らと勉強合宿のようなものを行っていて、旅館のセミナールームに集まっていた。友人たちは軒並み優秀であり、彼らの大半は公認会計士となり、資格を取得しない者たちは全員一流企業に内定していた。すでに資格を取った者も会社に入社することが決まった者も、引き続き勉強をしていた。

セミナールームにはまず3人の男性友達と、2人の女性友達がいた。みんな英語のテキストを広げ、思い思いに英語の勉強をしていた。私の右隣にいたのは帰国子女の男性の友人であり、彼は最初から英語をネイティブのように話すことができていたのだが、それでもまだ英語を勉強しており、その姿には感銘を受けた。彼と少し話をし、その奥にいた別の男性の友人に話をした後に、自分も勉強に取り掛かることにした。

すると自分の身体は瞬間移動し、別の旅館にいた。今度は、大学時代のクラスメートたちとそこに宿泊しているようだった。そこでも旅館で勉強合宿を行っており、畳部屋のような場所で何人かの友人たちと会話をしていた。クラスで仲の良かった友人たちの多くはロースクールに行き、法曹になった。彼らに少し法律について教えてもらっていると、突然私はその場に倒れ込んだ。どうやら極度の疲労が溜まっているようだった。

友人の1人が検査キットを取り出し、検査を受けると、どうやら私は何かのウィルスに少し感染しているようだった。他の全員は感染率0%とのことだったが、私は陽性19%とのことであり、そこから感染率が高まらないように安静にしておく必要があるとのことだった。実は私はその時まで、陽性と陰性の区別がついておらず、陽性というのは「ポジティブ」と表現されるものであるから、陽性であることはいいことのように捉えてしまう傾向があった。しかし実際にはその逆であり、ウィルスに感染している場合に陽性を示すということをそこで初めて強く自覚した。

その場に倒れ込んだ私は、疲労を回復させるために十分な睡眠を取ろうと思った。今朝方はそのような夢を見ていた。夢の中と同じく、実は私はつい最近までウィルスを含め、何かの検査の陽性と陰性の意味を明確にわかっていなかった。昨日、 ترامとメトロの違いが完全にわかっていなかったのと同じである。

夢の中の私は、ウィルスに少し感染しているようだったが、そこから十分な休養を取れば回復できるらしかった。ちょうど昨日の私も心身の疲労のピークに達しているようであり、観光は程々にしてホテルでゆっくり休んでいた。昨日の就寝は午後9時過ぎであり、そこから一度も目覚めることなく午前5時まで寝ていた。やはりフローニンゲンとアテネでは気候が全然違うため、特にアテネの日差しの強さによって日陰を歩いていても体力を奪われているようだった。

今日は美術館巡りをするのではなく、古代遺跡を巡る。持参したスポーティーな格好をして、できるだけ涼しい木陰を選んで散策をしたいと思う。とは言え、今日も無理をせず、今日と出発の日を除いてまだ丸3日ほど観光に当てられる日があるのだから、適度な数の遺跡巡りをしたい。アテネ:

2020/7/27(月)06:21

6051.【アテネ旅行記】本日の古代遺跡巡りと貴重な生命時間について

時刻は午前6時半を迎えようとしている。今、ようやく辺りが随分と明るくなってきており、1日の始まりを感じる。アテネの天気の良いから存分にエネルギーを享受させてもらっていると思うのだが、如何せんそのエネルギーが巨大なものであり、とりわけ太陽エネルギーの摂取はほどほどにすることが賢明だと改めて思う。

今日はホテルでの朝食を少し遅めに摂り、ホテルから反時計回りに歩いていく形で古代遺跡を巡っていこうと思う。古代遺跡群に到着する前に、ホテルからすぐ近くのところにギリシャの民族音楽博物館があり、そこは無料で入れるらしいので、ちょっと中を覗いてみようと思う。そこからは順番に、Roman Agora、アッタロスの柱廊(Stoa of Attalos)、ヘファイストス神殿(Temple of Hephaestus)、古代アゴラ(Ancient Agora)、Old Temple of Athena(パルテノン神殿)、Acropolis of Athens、ヘロデイス・アッティコス音楽堂(Odeon of Herodes Atticus)、Temple of Olympian Zeus、ハドリアヌスの凱旋門(Hadrian's Arch)、Theatre of Dionysusを順番に歩いていく。

列挙すると、随分と多い数になるが、これらは全て半径500mの円の中にあるため、それらを全て見て回ることも不可能ではないだろう。だが、日差しが厳しいことを考慮に入れて、実際に歩いてみて体力的に厳しそうであれば、また違う日にいくつかの遺跡を巡るようにしたい。そのあたりは柔軟に変更したいと思う。

昨日は、昼頃にはもうホテルに戻ってきており、ホテルでゆっくりしていた。久しぶりに映画を2本見た。それらは全て時間をテーマにしたものであり、時間について改めて考えるきっかけを与えてくれた。自分の生命時間の貴重さについて再度立ち止まって考え、他者の生命時間に対しても尊重の念を持つ必要があることを思った。先日の日記の中で「時間倫理」について言及したように、とりわけ現代社会においては、私たちの時間を目には見えない形で奪う、ないしは浪費させる仕組みで溢れている。

社会全体として時間倫理が希薄であり、貴重な生命時間を奪う目には見えない仕組みに自覚的にならないと、本当に私たちの生命時間はいともたやすく擦り減っていく。今日からは心を改めて、これまで以上に自分の時間を自分なりに大切にしていこうと思う。

時間を奪う外的な刺激や誘惑に飲まれないように絶えず意識すること。そうした刺激や誘惑によって引き起こされる反動的な行動に出るのではなく、そうした形で時間を使うぐらいであれば自分の取り組みを少しでも前に進めることやゆっくり休むことに使う。意識を外に向けるのではなく、意識を内に向けること。そうしたことを大切にしたい。

ふと空を見上げてぼんやりとすることや、画集をパラパラとめくったり、読みかけの本のページを何気なくめくってみるというのもいい。自分の生命時間は自分を養ってくれる形で使っていこう。それが本来の生命時間の使われ方なのだと思う。アテネ:2020/7/27(月)06:44

6052.【アテネ旅行記】昨日起こった事件

時刻は午前6時を迎えた。アテネ滞在の6日目が始まった。

昨日、とんでもない失態をしてしまった。それは何かというと、財布を紛失してしまったことである。それは盗難ではなくて、おそらくどこかに落としてしまったのだと思う。しかし、それがどうも変なのだ。

昨日は午前10時ぐらいにホテルを出発し、古代遺跡巡りに出掛けた。リュックサックの中に財布、タオル、パスポートを入れ、リュックの脇に水のペッドボトルを置いて出掛けた。ホテルを出発する直前に、確かに財布をリュックの中に入れたことを覚えている。昨日もまた気温が高かったので、歩き始めてすぐにタオルをリュックから取り出した。私がリュックを開けたのはその時だけだった。そして

その時には、リュックを少し開けてタオルを取り出したただけなので、財布が落ちるはずはないし、落ちたとしてもすぐに気づくはずだった。そこから1時間ほどかけてアクロポリスに向かってゆっくり歩いていき、その途中で人と接触したことはない。混雑した場所に身を置いたことはなく、誰からもリュックを触られることはなかった。

アクロポリスに到着し、中を見学したいという思いが高まらなかったのも、外観だけを眺め、しばらく木陰のベンチに腰掛けながら遠くの景色を眺めていた。そこからはアテネ市内が一望できたこともあり、その眺めを楽しんでいたのもである。

行きを見つけることのできなかつた民族音楽博物館を探しに再び歩き始め、無事にそれを見つけることができ、入場料を払おうとした時に財布がないことに気づいた。その時、確かに財布をリュックに入れていたのでおかしいなと思い、もしかしたらリュックに入れたと思い込んでいるだけであり、ホテルに置きっぱなしになっているのかもしれないと思った。

幸いにもパスポートやその他のものはリュックに入ったままになっていた。そこからホテルに引き返し、財布にルームキーを入れていたので、新しくルームキーを発行してもらい、部屋に戻った。すると、いくら探せども財布は見つからなかった。まだホテルの残りの宿泊分の費用を支払っておらず、宿泊に関する少額の税金の支払いもまだだった。

クレジットカードを差し止める前に、クレジットカードの番号を通じてなんとかホテルの支払いを済ませ、その後、クレジットカードだけではなく、キャッシュカード、オランダの銀行のデビットカードなどを差し止めた。そこからは最寄りの警察署に行き、紛失届を提出した。

ホテルのコンシェルジュの年配女性が親身になって助けてくれ、警察署への届けに関して教えてくれただけでなく、日本の領事館に電話をしてその後の対応について教えてくれた。財布に現金も含めて、全てのお金が入っていたこともあり、私は文字通り無一文になってしまったのだ。帰りの際に、ホテルから空港までのバスの代金と、アムステルダム空港からフローニンゲンの駅までの列車賃さえあれば、問題ないと思ったのだが、それさえもなくとも困った。領事館の職員の方が教えてくださったウェスタンユニオン銀行に送金を試そうと思うが、どれくらいの日数で送金が完了するかが鍵を握る。

アテネに滞在をするのは今日を含め、あと3日ほどしかないので早急に対応をしたい。少なくとも6ユーロさせれば、なんとかオランダには戻ることができるのだが…。その間はもちろん、ホテルの朝食以外は何も飲み食いをすることをせず、期せずしてのファスティングに向けた準備のような形になりそうだ。アテネ:2020/7/28(火)06:31

6053.【アテネ旅行記】盗難事件の問題の解決

時刻は午前5時を迎えた。辺りはまだ真っ暗だが、アテネ滞在の7日目が静かに始まった。

実は一昨日の午前中にある出来事に巻き込まれ、その対応に追われる形でその日の午後と昨日の時間を使っていた。端的には、財布を紛失してしまったのである。財布をどこかに落としてしまったとは考えにくく、それでいて明確に盗まれたという事態に遭遇した訳でもなく、それは「紛失した」としか言いようがない状態である。ただし可能性で考えてみたら、一昨日の朝に確かにリュックに財布を入れていたことは確かであり、おそらく私が気づかないような巧妙さで盗まれてしまったのだと思う。

そのようなことを書き留めてみたところ、すでにこの件については昨日の朝に日記を書き留めていたことに気づいた。なので、その後どうなったかについて書き留めておきたい。端的には、ハーグに住む友人に助けをもらい、無事に問題が解決した。財布が戻ってきた訳ではないが、何が問題だったかという、オランダに戻る現金をいかに確保するかということだった。

ホテルの宿泊費は無事に支払い終えており、宿泊にかかる税金も払い終えていた。あと必要な金額は、ホテルから目と鼻の先にあるシンタグマ駅から空港までの高速バスの費用6ユーロだった。すでに航空チケットは確保していたので、アテネの空港に到着することさえできれば、アムステルダム空港には戻ることができた。そこからはハーグに住む友人に迷惑をかけてしまうが、空港で落ち合い、お金を貸してもらおうと思っていた。空港まで迎えに来てもらうことすらも迷惑かと思ったので、そうであれば、最初からお金を借りて、フローニンゲンの自宅まで戻れるようにしようと思った。

幸いにも、領事館の方に教えてもらったウェスタンユニオン銀行の海外送金サービスを使って、友人にオランダからアテネに送金してもらい、無事に現金を入手することができた。今回の1件を通じて、色々と考えさせられることがあった。1つには、人間の意識と無意識の脆弱さである。一言で述

べれば、私たちはいとも簡単に意識や無意識の世界に侵入され、そこで操作がなされてしまうというものだった。

財布を盗まれたという可能性で考えると、私が気づかないぐらいに巧妙に無意識の中に侵入され、気づかないうちに財布をリュックから抜き取られていたのだと思う。人混みの中にいることは1度もなかったし、リュックに触られた記憶すらないのだが、唯一人と接触があったとすれば、アクロポリスに向かって坂道を歩いている最中に、英語を話すどこかの国のカップルの女性に左足のかかとを踏まれたぐらいだった。それも大きく踏まれたわけではなく、足が当たったという程度のものだった。記憶に残っているのはそれぐらいであり、ひょっとすると、わずかに足が当たって「すみません」と言われたこのことが自分の意識を逸らされてしまい、その間に財布を抜き取られてしまったのだろうか。依然として財布の紛失は謎に包まれたままである。

2つ目に考えていたのは、盗んだ側の気持ちに関するものである。財布には現金がわずか60ユーロぐらいしか入っておらず、幸いにもクレジットカードもデビットカードも使われた痕跡はなかった。そうしたことを考えると、盗んだ側にとっては60ユーロしか手に入れなかったことになる。スリは複数犯の可能性が高いとのことであり、仮に複数犯であるとしたら、彼らも生活に困っての犯行であろうから、60ユーロという金額はむしろ申し訳なさを感じる。悪をなし、その業を魂に刻み込んで一生それを背負いながら生きていく代償を考えると、なお一層申し訳なさを感じる。そのようなことを考えながら、友人に送ってもらった現金を受け取りに、ホテルからすぐ近くの両替場のようなウェストユニオン銀行の店舗に行き、そこで無事に現金を受けとった。

そこは本当に両替場のような場所であり、個別ブースにいたのは1人の女性であり、ガラス越しに会話を交わした。その女性は親身な対応をしてくれ、初めてウェストユニオン銀行を使うのかという質問から始まり、私が財布を紛失した旨を伝えると、欧州には物騒な場所がまだまだたくさんあり、コロナの影響で経済が打撃を受けたこともあり、スリなどが増加傾向にあるらしいので注意が必要だと教えてくれた。

身元確認などの手続きをして、現金を受け取った時には、その現金を送ってくれた友人に対して再度感謝の念が溢れ、また受付を担当してくれた女性の名前がマリアということもあり、その方が聖母マリアのように思えた。アテネ:2020/7/29(水)05:44

6054.【アテネ旅行記】アテネ滞在7日目の計画

時刻は午前6時を迎えた。今、ゆっくりとアテネの空が明るくなり始めている。

昨日は、オランダで利用しているABN AMRO銀行のアテネ支店に足を運び、現金の確保に関して助けを求めたが、そこにはATMなどがなく、そもそもそこでは送金を含め、一般の銀行業務を行っていないようだったので、そこでは問題が解決しなかった。そこからハーグに住む友人に至急連絡を取り、すぐに返信をしてくれ、無事に問題が解決した。その友人とは単にメールでやり取りをするだけではなく、Zoomでも話をさせてもらい、結局5時間近く様々なことに関して話をしていたように思う。

8月と9月はもう旅行しないことにしたのだが、ハーグに住むその友人が9月にフローニンゲンに遊びに来てくることになったので、それを楽しみにしたい。一昨日の午後と昨日の丸1日半は、財布の紛失に伴う対応に追われていて、今日からようやく心が平穏な状態に戻った。

振り返ってみると、今回の旅行は半年振りのものであり、旅行の前には幾分精神が揺さぶられることがあったので、自分の精神状態は少しばかりいつもと違っていた。そうしたことが今回の事件につながっているかもしれないと思うが、昨日友人と話していたように、それは何かの導きによって起きたと捉えられなくはない。そこには大きな学びがあっただけではなく、それは何か運命的なことであったとすら思う。そうした形で今は一昨日の事件を捉えている。

今日からは細心の注意を払って再び観光に出かける。とは言え、もう街を歩き回ることにはせず、目的の場所で観光を終えたらホテルに速やかに戻ろうと思う。今日は、ホテルから南下したところにあるアテネ国立現代美術館(EMST)に足を運ぶ。当初はこの美術館に足を運ぶことを考えていなかったのだが、最近自分の中で現代アートへの関心が高まり、アテネに到着後調べてみたところ、この美術館を見つけ、興味深く思えたので足を運んでみることにした。

明日はアテネ時間の正午から、協働プロジェクト関係のオンラインミーティングが1件あり、それをホテルの自室で行ってから、MOMus - Museum Alex Mylonaという美術館に行く。こちらも現代アートに関するものである。本日訪れる美術館はホテルから歩いて20分弱であり、明日に訪れる美術館

はホテルから10分ほどの距離である。どのような作品から何を感じたかについてはまたホテルに戻ってきてから書き留めておこう。

最後に、この秋に日本に一時帰国するに際して、今回紛失した財布には日本の免許証も入っており、免許の更新の際には、アテネの警察署に発行してもらった紛失届出書を提出する必要があるとのことだったので、こちらの届出書については忘れずに秋の日本の一時帰国の際に持参したい。今回の一件は、喪失したもの以上に大きな学びがあり、考えさせられることが多々あったように思う。アテネ:2020/7/29(水)06:31

6055.【アテネ旅行記】アテネ国立現代美術館を訪れて

つい今し方、アテネ国立現代美術館(EMST)からホテルに戻ってきた。ホテルの朝食をゆっくりと摂り、美術館に向かう頃には随分と気温が上がっていたが、木陰に入ると涼しい風が吹いてきて、20分弱ほどウォーキングをしてもほとんど汗を掻くことはなかった。

美術館の開館とほぼ同じ午前11時頃に到着をし、セキュリティーチェックを通過してチケット売り場に向かったところ、本日は幸いにも無料で入れるとのことだった。受付の係員がとても気さくな男性であり、私の出身地を知ると日本語で挨拶をしてきた。

現代アートの特にオブジェ関係から美を汲み取ることは難しいが、絵画作品であれば、思わず足を止めて見入ってしまうものがあった。1つだけ面白いと思った作品を挙げれば、ギリシャ人の現代アーティストBia Davou(1932-1996)の367枚の一連のデッサンである。解説を読むと、それらの作品はコミュニケーション理論や幾何学的な理論をもとに作られているらしく、1つ1つの作品を組み合わせた全体の中に何か物語があるように思えた。この美術館には本日無料で入館できるにもかかわらず、やはり他の美術館と同様にほとんど客がいなかった。明日は、ホテルから歩いて10分ほどのところにあるMOMus - Museum Alex Mylonasに足を運ぼうと思う。こちらの方が絵画作品が充実している印象を持っているため楽しみである。

そう言えば、今朝も何かしらの夢を見ていた。具体的な内容はもうほとんど覚えていないが、平穏な気持ちにさせてくれる夢だったように思う。昨日はハーグに住む友人のおかげで現金を入手することができ、そのお金で無事にオランダに戻れることになり、やはりホッとしたのだろう。

これまでは毎朝、朝食を摂る際にレストランに行く時には本を持っていった。今はセルフではなく、飲み物も食べ物も全て逐一オーダーする必要がある、注文が届くまでの待ち時間を本を読んで過ごしていたのである。ホテルのレストランは10階にあり、外のテラス席に出ると、そこからはパルテノン神殿を拝むことができる。そうした景色を堪能しながら本を読んだり、朝食を摂ることができるのは幸福なことである。

今朝からはレストランに本を持っていくのではなく、iPad Proを持っていくようにし、注文が届くまでの時間を絵を描いて過ごすことにした。日記の執筆や作曲をする際には、iPad Proだと創作活動がしやすく、またどうしても創作に時間がかかる。一方で、iPad Proを使って絵を描くことは場所も時間も選ばずに創作活動がしやすい。注文が届くのを待っている間に絵を描いていると、ふと、そう言えば今使っているAndroidの携帯には種々のアプリがなぜかダウンロードできなくなっているのだが、iPadであればダウンロードできるのではないかと思った。

早速、Apple Store経由で調べてみると、ABN AMRO銀行やPay Palのオンラインアプリをダウンロードできることがわかった。今回の財布の盗難を受けて、それらのアプリをダウンロードしておくことは非常に有益だと気づき、後ほどダウンロードをしておこうかと思う。今日はもうここからホテルでゆっくりくつろごう。今から仮眠を取り、1曲ほど曲を作った後に、「一瞬一生の会」の補助音声教材を作成しようと思う。アテネ:2020/7/29(水)13:27

6056.【アテネ旅行記】アテネ滞在8日目の夢

時刻は午前5時半を迎えた。今朝方は少しばかり印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、前職時代のオフィスの中にいた。規定の出勤時間よりも少しばかり早くオフィスに到着したのだが、自分の席に向かうのではなく、まずはオフィス内の図書室に向かった。

図書室に到着すると、夢の中の私が先日訪れた東京オフィスの図書室よりも随分と小さく感じた。実際に、所蔵されている書籍の数も少なく、またどういうわけか椅子も幼稚園生用の小さなものであり、それはとても可愛らしく思えた。

図書室にはまだ誰もおらず、私はそこで本を読むのではなく、朝食を食べようと思った。ちょうどゆで卵を持参しており、あまり音を立てずに殻を割り、その場でサッとそれを食べようと思った。

すると誰かが図書室に入ってきた。見ると、部署が異なるシニアマネージャーの方だった。ちょうどゆで卵を口に含んだところだったのでタイミングが悪く、挨拶の言葉が出しづらかった。かろうじて挨拶をすることができ、私はそそくさと図書室を後にすることにした。

自分の席に到着し、壁にかけられている時計を見ると、もう勤務時間が始まっていた。時間についてはそれほどうるさくない会社であり、チームとしてもそういう雰囲気があったが、それでも遅刻と思われるのは好ましくなかった。そもそも私は遅刻はしておらず、入社時間の前にもう図書室にいたこともあり、尚更そのようなことを思った。

自分の席に到着すると、自分がスリーピースのスーツを着ていて、さらにニット帽を重ねて2つ被っていることに気づいた。外は随分と寒かったのだろうか。まずはスーツの上着を脱ぎ、その後、ニット帽の存在に気づいたのでそれらを取った。私は、後ろの席に座っている男性の上司に挨拶をし、それに合わせて、左隣に座っている女性の先輩に挨拶をした。

2人ともいつもと同じくこやかに挨拶を返してくれた。挨拶を済ませてから、パソコンの立ち上げを待っている時に、机の上をティッシュか何かでさっと拭き取り、小物の位置を整えた。机の上を少し綺麗にし、スペースを確保したかったのだ。

パソコンが立ち上がったタイミングで、後ろに座っていた上司が私に1枚の折り畳まれた紙を黙って渡してきた。するとその上司はサッとどこかに行ってしまった。上司の格好を見ると、どういうわけか私服になっており、手には花束があった。後ろの席を振り返ると、上司の持ち物が全て消えており、もぬけの殻になっていた。

上司から渡された紙を開くと、そこには私の名前が平仮名で2回ほど書かれており、それに続く形で平仮名の暗号文のようなものが書かれていた。最初私はそれが何を意味しているのかわからなかったが、上司の後ろ姿を見た時に、その意味がわかった。上司は会社を退職することになり、自分に対してこれからも頑張れというメッセージを送ってくれたことに気づいたのである。その意味に気づいた時、ふと顔を上げると、上司はアドミニの方々に挨拶をしており、手に持っていた花束をその内の1人に渡し、これまでの感謝の意を告げていた。すると、別の部署の若い社員の方が上司に声を

かけ、「独立なさるんですか？」と声をかけ、上司は「いや、転職することにしました」と笑いながら述べていた。

私は再度上司が渡してくれた紙に視線を落とし、その上司はこれまで自分を大切に育ててくれたことを思い出し、自然と感謝の涙が溢れてきた。私はその涙を他のメンバーには見せるまいとし、手で目を押さえながら再び仕事に取り掛かった。

今朝方はそのような夢を見ていた。夢の中で感動して涙を流すことが時折あるのだが、今朝の夢もまたその1つだった。今回の感動は、深い感動が静かに滲み出してくるようなものだった。夢の中で涙を流した時に目が覚めたのだが、その時にもまだ自分の内側には感動の感覚質が残っていた。

アテネ:2020/7/30(木)06:09

6057.【アテネ旅行記】アテネ滞在8日目の計画

時刻は午前6時を迎えた。いま、ゆっくりとアテネの夜が明けてきており、朝日が昇り始めた。本日が、いよいよアテネでの滞在の最終日になる。明日はもうフローニンゲンに戻る日であり、丸一日アテネで自由に過ごすことができるは今日で最後だ。

今回のアテネ旅行では天気恵まれ、事前情報の通り、アテネは7月と8月には雨の降る日はあったとしても1日ほどである。それ以外は雲ひとつない快晴の日が続くのが特徴であり、今回の滞在中もまさに全ての日がそのような天気だった。

今日は最高気温が37度まで上がり、最低気温は26度とのことである。フローニンゲンの今日の最高気温は22度、最低気温は9度と随分差がある。明日フローニンゲンに戻る時には、フローニンゲンも珍しく気温が上がっているようなのだが、それでも最高気温はアテネの最低気温と同じぐらいの27度だ。とはいえ、このような気温はフローニンゲンには珍しく、明日はフローニンゲンに到着した時に何か上に羽織る必要はなさそうだ。明後日以降は再びフローニンゲンの気温は下がり、最高気温は20度前後、最低気温は13度前後だ。もう8月に入ろうというのに、そうした涼しい日が続くようだ。今、8月のフローニンゲンの天気予報を確認して驚いたが、最高気温が25度を超えるのは、明後日のみのようであり、気温が上がらないままに9月を迎えるようだ。今年は本当に冷夏だ。

一昨日に私を助けてくれたハーグの友人が9/5にフローニンゲンに遊びに来てくれることになっていて、その日は幸いにも晴れのように何よりである。

今日はアテネ時間の正午から協働プロジェクトのオンラインミーティングが1件ある。それまではホテルでゆったりとした時間を過ごそうと思う。朝食を摂る前に絵を描いたり、作曲をしたりして創作活動を楽しみ、朝食を摂り終えてからは読書に取り掛かろうと思う。フローニンゲンの自宅から持ってきた書籍は早々と読み終えたのだが、明日にフローニンゲンに戻る時にはまた再読をしようと思う。それは、ロイ・バスカーの思想体系をわかりやすく解説したものだ。

昨日は、ポール・クレーの画集の解説文を丁寧に読んでいき、またクレーの絵を眺めることを堪能していた。それに合わせて、アテネ市内の書店で購入した、芸術を精神分析の観点で解説している書籍も再読をし終えた。本日は、テオドール・アドルノが現代音楽について解説した書籍の再読を行いたい。そのような形で時間を過ごしながらか、オンラインミーティングを終えたら、MOMus - Museum Alex Mylonaに向かう。

昨日訪れたアテネ国立現代美術館は、オブジェ中心の現代美術館であり、なかなか理解することが難しい作品が多かった。一方で、本日足を運ぶMOMus - Museum Alex Mylonaには、絵画作品がより多く所蔵されているようなので、それらを鑑賞することがとても楽しみである。

ちょうど昨日の午後にホテルの自室で仮眠を取っている時に、そう言えば、現代アートに関して友人と話をしているビジョンを見ていた。そこにいた友人が誰かは思い出せないが、お互いに落ち着いた気持ちで現代アートについてあれこれと対話をしていたのを覚えている。アテネ:2020/7/30
(木)06:33

6058. 【アテネ旅行記】 不公平さを是正する経済思想と経済システムへの関心

時刻は午前6時半を迎え、アテネの東の空に朝日が昇ってきている姿が見える。

今私が滞在しているのは、本当にアテネの中心なのだが、朝や夜は意外にもとても静かだ。暑さのせいかな、それとも国民気質なのか、朝や夜に騒ぐ人などいない。

今朝も朝食を摂る10階のレストランから、朝日に照らされたパルテノン神殿を拝みたい。近くで見ると、適度な距離がある方がその良さが見えてくるものもある。そのようなことを思う。

今回、古代遺跡を巡ることにしては、財布の紛失があったので苦い思い出となったが、財布の紛失は大きな学びをもたらしてくれた。さらには、自分をまた違う関心事項に大きく向けてくれる働きがあった。

以前より、今の経済思想や経済システムではない新たな思想とシステムが必要だという認識から、経済の探究を行おうとしていた自分がいる。そもそも私は日本の大学の学士課程にいた時には、積極的に経済関係の授業を履修していた。その時には経済思想についてはほとんど学んでいなかったこともあり、ある時ふとそのテーマに関心が向かった。それは断続的にこれまで何回かやって来ていた。

今回、アテネで財布を盗まれるという体験をし、またアテネの市内にいる浮浪者を見た時に、不公平さを是正する経済思想と経済システムに強い関心を持ったのである。アクロポリスに向かう道中、道端でしゃがみ込んでいる物乞いをする若い母親とその母親に抱き抱えられている赤子のような小さな男の子の姿を見た。思わずその母親と目が合っしまい、彼女は最初ギリシャ語で何かを話し、そこから英語に切り替えて物乞いを始めた。

私は関わることなく素通りをしてアクロポリスに向かったのだが、今日の前で助けを必要としている人がいるにもかかわらず、古代遺跡の観光に向かっている自分は一体何をしているのだろうかと考えさせられた。仮に誰もが最低限の生活を保証されていれば、窃盗などの犯罪が起こる可能性は今よりもっと低くなり、世界がより安全な場所になると思った。もちろん、人間誰しもの中には悪が存在しており、また常人と狂人の差は紙一重であり、何かのきっかけに悪人や狂人になってしまうことがあるため、全ての犯罪をこの世界からなくすことはほぼ不可能だろう。だが、今よりもより安心安全な世界を作ることなら可能だと思うのだ。その鍵を握るのは、世界全体がグローバル規模でのシャドーと向き合い、既存の経済思想と経済システムに取って代わる、格差や不公平さを是正する新たな経済思想や経済システムだろう。

誰も不安を抱えたまま生活や観光などしたくないはずであり、ほぼ全ての人が内在的な悪を活性化させることなく生きれる社会を望むのではないかと思う。ここからはこの現代社会の中で霊性を復活させ、それを育んでいくことを目的にした実践霊性学や、この世界を美化していくことを目的にした実践美学に加えて、現代が直面しているシャドーや不公平さを乗り越えていくための実践経済学を探究していこうと思う。

8月には、シュタイナーの経済思想に関する書籍を最優先で購入し、本棚にある経済思想に関する書籍を再度読み返していこう。霊性学の泰斗であるシュタイナーの経済思想は、それもまた実践霊性学だとみなすこともできるだろう。まずはシュタイナーの経済思想を深く学んでいこう。アテネ：
2020/7/30(木)06:55

6059.【アテネ旅行記】MOMus - Museum Alex Mylonaを訪れて

時刻は午後4時半を迎えた。今日は正午にオンラインミーティングを1件ほどホテルの自室で行い、ミーティング後、ホテルから歩いて近くにあるMOMus - Museum Alex Mylonaに足を運んだ。美術館に向かっている最中、そう言えばホテルの10階のレストランから眺めることができるのはパルテノン神殿ではなく、アクロポリスであることに気づいた。どういうわけかそうした勘違いをしており、明日の朝食では、アクロポリスという正しい認識を持ってそれを眺めようと思う。

さて、本日足を運んだMOMus - Museum Alex Mylonaであるが、昨日訪れたEMSTとは異なり、興味深い絵画作品がより多くあった。想像していたよりも小さな美術館だったのだが、客は最初から最後まで私しかおらず、美術館を貸し切らせてもらっているような気分だった。

入館した時に、受付には1人だけ男性がいて、今はもうクレジットカードが手元にないので、20ユーロ札を渡そうとしたところ、どうやらお釣りが無いようだった。そのため、その男性はなんと親切にも、私を無料で通してくれたのである。私は心底その男性にお礼の言葉を述べた。

館内に所蔵されていた作品の中では、アテネ生まれの現代アーティストAlex Mylona (1920-2016)の作品と、名前は忘れてしまったが、ロシアの現代アーティストの抽象画が印象に残っている。この美術館の屋上にもオブジェ作品があるとのことだったので、屋上に上がってみたところ、日差しがも

のすごく強かったが、そこからアクロポリスを眺めることができ、またアテネの市内を眺望することができた。

全ての階の作品を見終えて、ミュージアムショップに立ち寄った。そこで何か画集を購入しようと思ったのである。確かに手持ちの現金は微々たるものだが、飯よりも書物や画集などの文献資料にカネを払うのが私の癖であり、ギリシャの現代アートの流れがわかる2冊の小さな画集(“Greek Postwar Abstraction” “Greek Postwar Abstraction: The Heroic Years”)と、ロシアのアヴァンギャルドの代表的なアーティストの作品が載っている画集“Russian Avant-Garde: A Selection from the Coastakis Collection”を購入した。

ミュージアムショップも受付の男性が支払いを担当してくれ、3冊とも倉庫から新品のものを取って来てくれた。客が私1人だったこともあり、その時に彼と雑談話をする中で、3日前に財布を盗まれてしまったことを伝えた。すると彼は私に同情をしてくれたのか、ミュージアムショップで販売されているブックマークやポストカードのどれでも好きなものを持って行ってくれと述べてくれたのである。

私はとても恐縮し、同時に彼の親切心にそこでも心底感謝した。私は遠慮がちに、人間を表現しているであろうカラフルな彫像が描かれた1枚のブックマークを選び、裏をめくってタイトルを確認すると、「The Always Crucified Man (常に十字架に張り付けられて苦しんでいる男)」というようなタイトルだったので、それを選ぶのをやめた。その隣のブックマークには、意味のわからない不思議なオブジェが描かれていて、裏をめくると、“Aphrodite”と書かれており、それはギリシア神話に登場する愛と美の女神であるから、愛と美に関心を持っている今の自分にぴったりかと思って、それをもらうことにした。

すると、受付の男性は、1枚のブックマークを持って行こうとした私に対して、「もっと持って行っていいですよ」と言い、さすがにそれは恐縮だと思ったのだが、その男性は率先してポストカードを2枚ほど取り出し、私に手渡してくれた。私はそこでも心を込めてお礼を述べ、入り口で笑顔で手を振って彼と別れた。美術館からホテルに戻る道中に、数日前に窃盗にあって残念な気持ちになったが、アテネの中にも当然ながら心美しき人たちがいることに対する喜びと感謝の念を噛み締めていた。

アテネ:2020/7/30(木)16:56

【追記】

ホテルに戻ってひと休憩をし、一昨日私を救ってくれたハーグの友人のブログを確認した。彼女の日記はいつも楽しみに読んでおり、アテネにいる時だけではなく、フローニンゲンにいる時も基本的に毎日読んでいる。友人の日記が更新されていたので、開いてみると、タイトルは新しかったのだが、内容が以前にアップされたものが再度アップされていて、肩透かしを食らった。本人に直接メールをして知らせるのではなく、あえてここに書き留めておくのが良いかと思った。アテネ:2020/7/30(木)17:01

6060.【アテネ旅行記】アテネ出発の朝に見た夢

時刻は午前5時を迎えた。今朝は午前4時半前に起床した。いよいよ今日はアテネを離れ、フローニンゲンに戻る。8泊9日の旅は、途中で思わぬ事態に巻き込まれたせいもあってか、はたまたそれが別種の学びをもたらしてくれたためか、あっという間の旅だった。

今日は正午過ぎのフライトに乗ってアムステルダムに向かう。アテネを出発するのが13:15であり、アムステルダムに到着するのは15:45だ。フライトの時間は3時間半ほどなのだが、アテネとオランダは時差が1時間ほどあるので、アムステルダムに到着した時間はまだ早い。

ホテル近くのシンタグマ駅から空港までは高速バスが15分に1本出ており、9時過ぎのバスに乗ろうと思う。そうしたこともあり、今朝は7時半前ぐらいにレストランに入り、余裕を持たせる形で最後の朝食を摂りたい。昨日まで誤解していたが、レストランのテラス席から見えるのはパルテノン神殿ではなくアクロポリスであり、今朝も天気が良いので、アクロポリスを拝もうと思う。午前8時半前に自室に戻り、再度忘れ物がないかを確認し、チェックアウトしたい。

アテネを出発する今朝方も夢を見た。夢の中で私は、広い自宅でマッサージを受けていた。そのマッサージがとても心地良く、夢見心地になりながら、私は少しウトウトしていた。ちょうどその部屋のリビングの机に母が座っていて、母は私のマッサージの様子を時々眺めていた。マッサージがちょうど終わりに差し掛かろうとしていた時に、私が不格好なパジャマ姿であり、それについて母が笑いながら指摘をしていた。マッサージをしていていた女性もその姿に気づいていたようだったが、

マッサージの最中には何も言わず、その時になって初めて少し笑っていた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私はアメリカの地方都市のどこかにいて、スーパーに向かっていた。ちょうど目の前には2人の日本人夫婦がベビーカーを押して歩いていて、ベビーカーには小さな男の子がいた。3人はどうやら家族のようであり、同じスーパーに向かっているようだった。後ろ姿から気づいていたが、2人の夫婦はあるテレビ局のアナウンサーのようだった。2人は共演したある番組をきっかけに仲良くなったらしく、そのまま結婚をしたようだった。2人はとても仲が良さそうであり、幸せそうな家庭の雰囲気が漂っていた。私はそれを見て、自分も幸せな気持ちになった。スーパーに到着してからも、私は2人の後を追うかのように同じコーナーを後ろから回っていて、2人の幸せそうな様子を絶えず見れて、幸福な気持ちの中で買い物をしていた。

最後の夢の場面では、私は海外のどこかの街のフットサルコートにいた。周りには大学時代のゼミの友人がいて、彼らと一緒に大会に出場することになっていたようだった。そこは海外なのだが、なぜか出場するチームのメンバーは全員日本人だった。そこには偶然ながら、小中学校時代の1学年上の先輩たちも出場しており、先輩たちが決勝に残ってくるような予感があった。

最初に対戦するチームがコートにやって来た時、そこに小中高時代の親友(SI)がいた。まさか彼が相手チームにいるとは思っておらず、とりあえず挨拶をして、お互いの健闘を祈った。初戦はなぜか私は試合に出場することができないことになっていて、それは残念だった。こちらのチームには、同い年の元日本代表のサッカー選手がいて、彼もまた初戦には出場できないようだった。彼と2試合目以降一緒にプレーすることがとても楽しみであり、ウズウズしながらその時を待っていた。

いざ初戦が始まると、相手チームにいる親友がコート上に不思議な魔法を施した。なんとフットサルコートが水の張られていないプールになった。プールの底には絵具のようなものが撒き散らかされていた。親友曰く、それはアートの1つとのことであり、しかもそれは絵具ではなく、食べることのできるお菓子のようだった。試合に出場する選手たちはもちろんのこと、ベンチにいる私も思わずコートに近づき、その見事なお菓子のアートに魅入っていた。こちらのチームの1人のメンバーがそのお菓子を指ですくって食べてみると、とても美味しいとのことだった。今朝方はそのような夢を見ていた。アテネ:2020/7/31(金)05:43